

シスターフッド・オブ・ナイト
夜の姉妹団——原作と二つの映画版

柴田元幸

アメリカ人作家ステイヴン・ミルハウザーの短篇小説「夜の姉妹団」は雑誌『ハーバース』1994年7月号に掲載され、のち短篇集『ナイフ投げ師』（1998）に収録された（邦訳白水Uブックス、柴田元幸訳）。

ミルハウザーは緻密な想像力を身上とし、自動人形、博物館、遊園地、幻想の都市などを隅々まで高解像度で幻視した短篇・中篇小説で知られる作家である。そして「夜の姉妹団」にあつてその想像力は、夜な夜な森に出かけていく女の子たちの集団という絵柄に向けられる。ひとつの町全体を舞台に、さまざまな人々の動きや思いを「私たち」と称する語り手に語らせるという手法をミルハウザーはしばしば採るが、この作品もまさしく、「私たち」と名のる語り手が、少女たちはなぜ森に行き、何をしているのかをめぐる人々の憶測や不安を讀者に伝える。ひとつの町に錯綜するさまざまな思いが、語り手を通して巧みに絡めとられる作品であり、現代アメリカを代表する短篇作家（2012年にはすぐれた短篇集に贈られるヘザ・ストーリー・プライズ）も受賞した）であるミルハウザーの代表作のひとつと言つてよいだろう。

「夜の姉妹団」はこれまでに二度映画化されている。ひとつめは2006年リリースの、ジェフリー・モス監督・脚本による17分の短篇映画。そしてふたつめが、今回の青春映画学園祭で上映されるキャリン・ウェクター監督の2014年リリース長篇『シスターフッド・オブ・ナイト 夜の姉妹団』である。いずれも監督デビュー作であり、確認できるかぎりどちらもまだ第二作は発表していない。



ミルハウザー作品の映画化としては、これまでに「幻影師、アイゼンハイム」（『バーナム博物館』白水Uブックス）を原作とする『幻影師アイゼンハイム』（ニール・パーガー監督・脚本、2006）がある。正直言つてこの映画は原作とはほとんど関係がなく、あまり感心できなかったが、それに較べて「夜の姉妹団」に基づくこの二つの映画には、それぞれ大いに共感できるところがある。といつてもこの二作、原作に対するアプローチはまったく違つている。大まかに言えば、モスの短篇は原作尊重型であり、ウェクターの長篇は換骨奪胎型である。

まずモス短篇は「私たち」という語り手をそのままナレーターに起用し、ナレーションの言葉も大半を原作からそのまま抜き出している。17分という上映時間も（実質は15分くらい）、原作を読むのに要するよりやや短いという程度で、細部を適宜省きつつ原作の重要箇所を順に再現していく。対してウェクターの長篇は、ナレーターはたしかに「私たち」なのだが、それは町全体を代表する「私たち」ではなく、その「私たち」にとつての大いなる謎たる女の子たちなのだ。原作とモス版の「私たち」は、あの女の子たちは何を考へているのだろうか、と何とか彼女たちに届こうとし、ウェクター版の「私たち」は「Listen carefully - this is our story」（よく聞いて 私たちの真実を）と語りはじめ。後者はほとんど前者二作への返歌と言つてもいいくらいである。そもそもウェクター版は監督も脚本家も女性であり、主要登場人物もみな女性ならプロデューサーも女性。まさに「女性の映画」なのだ。

もちろん、原作にどこまで忠実か否かは映画の価値を判断する上ではまったく基準にならないし、また、女性の映画だから意義があるなどと謳いあげるのもあまり意味がない。とにかく長篇映画『シスターフッド・オブ・ナイト

夜の姉妹団』がやろうとしていることは、短篇小説「夜の姉妹団」やそれに基づく短篇映画がやろうとしていることとは方向性においてほとんど正反対とも言える。どっちが偉いか、を考へてもさして意味はない。

というような留保を述べた上で、二つの映画がどれだけ「よく出来ている」かを言うなら、個人的にはモス監督の短篇の方がだと思う。一コマ一コマがシャープで、そこで目指されていることもすんなり伝わってくる（ちなみにこの短篇は現在 <https://vimeo.com/12264089> で見ることができる。興味のある方はご覧ください）。それに較べて、ウェクター長篇は、時おり絵がいまひとつピタツと決まらず、どこにフォーカスがあるのか見えていてとまどうことがあり（これは単に僕の見方が悪いせいなのかもしれず、あくまで主観的印象なのだが）、かならずしも志どおりの結果になつていないように思える。

が、だからと言つて『シスターフッド・オブ・ナイト 夜の姉妹団』の方が映画として「落ちる」かという点、そうとも言いきれない。一概に言つて、モス短篇は志したことを手堅く成し遂げている観があり（それはそれで立派である）、ウェクター長篇は達成度はいまひとつだが目指しているものは大きいという印象を受ける。少なくとも、短篇小説を長篇映画にふくらませる上で、単に同じ話を引き延ばすのではなく、原作とは違い一人ひとりの女の子が抱えている悩みや迷いを丁寧に思い描いている点（特に、原作にはまったく登場しない中国系の女の子が両親に対して抱く複雑な感情はくつきりとしてリアルだ）は大きなプラスだと思う。

ウェクター監督自身、インタビューで「『シスターフッド・オブ・ナイト 夜の姉妹団』でいちばん好きなのは、

★1

『The Sisterhood of Night』
監督：ジェフリー・モス
原作：ステイヴン・ミルハウザー
撮影：Christopher Reitano
音楽：アンジェリカ・ネグロン
キャスト：Amanda Addams, Laura Anderson, James Berner
2006 / 17分 / アメリカ

★2

『幻影師アイゼンハイム』
監督：ニール・パーガー
脚本：ニール・パーガー
原作：ステイヴン・ミルハウザー
撮影：デイック・ホープ
音楽：ライリッパ・グラス
キャスト：エドワード・ノートン、ポール・ジアマッティ、ジェシカ・ビール
2006 / 110分 / アメリカ、チェコ